# 聖霊降臨後第24主日（特定26）　マルコ12章28―34節

［直訳］

28 そして　近づいて　律法学者の一人が
聞いて　彼らが　議論しているのを、
見て　次のことを　立派に　彼が答えた　彼らに
尋ねた　彼に、
「どれが　あるか　第一の戒めで　すべての（中で）」

29 答えた　イエスは　次のことを
「第一は　（これで）ある、
聞け、イスラエルよ、
主は　私たちの神は　唯一の主で　ある、
30 そして　あなたは愛しなさい　主を　あなたの神を
あなたの心全部から
そして　あなたの魂全部から
そして　あなたの理性全部から
そして　あなたの強さ全部から。
31 第二は　これ
あなたは愛しなさい　あなたの隣人を　あなた自身をのように。
これらよりもより大きい　他の　戒めは　ない」。

32 そして　言った　彼に　律法学者は、
「立派に、先生、真理の上に　あなたは言った　次のことを
唯一で　彼はある、
そして　ない　他のものは　彼を除いて。
33 そして　愛することは　彼を
心全部から
そして　知力全部から
そして　強さ全部から、
そして　愛することは　隣人を　自分自身をのように、
まさって　いる　すべての焼き尽くす献げ物やいけにえより」。

34 そして　イエスは　見て　次のことを　賢明に　彼は答えた
言った　彼に、
「あなたは遠くない　神の国から」。
そして　誰も　もはや彼に尋ねることをしようとしなかった。

［新共同訳］

28 彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」29 イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。30 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」32 律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。33 そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」34 イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

**①構成**

ⓐ28節と34節の対応関係

㋐28節の二重線にあるように、律法学者の一人はイエスが立派に「答えた」のを「見て」おり、イエスも34節の二重線にあるように、律法学者の一人が賢明に「答えた」のを「見て」いる。イエスの告げる福音とユダヤ教の教えとの差は、さほど大きくはない。理解し合えるし、一つだといえるほどに近い。

㋑さらに、点線で示したように、「尋ねる」も28節と34節に使われている。ただし、34節では、誰も「もはや尋ねることをしようとしなかった」とあるから、イエスと「律法学者の一人」の一致は完全なものであったと言えるだろう。

ⓑ両者の対話（29―33節）

㋐この一致は、29―33節の対話によって確認される。29―31節はイエスの言葉であり、32―33節は律法学者の一人の賛同の言葉である。両者は神への愛と隣人愛とを結び合わせる点で一致しているが、相違点もある。

㋑イエスは第一の戒めを引用するとき、「聞け、イスラエルよ、私たちの神」を含めており、二つの掟を並記し、それを「他の戒め」と比べている。これに対して、律法学者の一人は、「彼を除いて他のものはない」を加え、二つの掟を一つに合わせ、それを「焼き尽くす献げ物やいけにえ」と比較している。

**②律法学者の問い（28節）**

ⓐマルコ12章は、様々な敵対者との論争を伝えている。28節以下はそれを締めくくる物語であるが、「律法学者の一人」とイエスとが互いに賛同し合う点で、12章の論争物語とは異質である。

ⓑマタイやルカの並行箇所では、この律法学者はイエスを「試そうとして」尋ねたとあるが、マルコにはそれがない。その代わりに28節に「…近づいて、彼らが議論しているのを聞いて、彼が彼らに立派に答えたのを見て」と書くことによって、27節以前の敵対者との論争と結びつけ、その結末としている。こうして、一連の論争がイエスに賛同する律法学者の登場で締めくくられる。これがマルコの特徴である。

ⓒユダヤ教には六一三もの掟があった。これだけ多くあれば、「どれが第一の戒めか」という問いが生じて当然である。こうして戒めをランクづけようとする努力がなされたが、すべての戒めを守るべき義務はなくなることはなかった。

ⓓ律法学者（グラムマテウス）

㋐使徒言行録19章35節では「書記官」の意味でエフェソの高級役人の肩書を指し、マタイ13章52節では（おそらく二三34でも）キリスト教の「学者」を指すが、それ以外の箇所ではユダヤ教の「律法学者」を表す。

㋑律法学者のおもな職務の一つは、律法の研究にたずさわり、律法やその解釈を教えることである（マコ一22、マタ七29）。占星術の学者からメシアの誕生を聞いたヘロデ王は、メシアの誕生すべき地を尋ねるために、祭司長のほかに律法学者を集める（マタ二4）。パウロは、当時の最も高名な律法学者ガマリエルから先祖の律法について厳しい教育を受けている（使二二3）。

㋒さらに、律法やその解釈を運用して、人の振る舞いや物事の是非を裁定するのも、律法学者の重要な役目である。祭司長や長老と共に、最高法院のメンバーとして登場することも多い（マコ一五1など）。共観福音書では、律法学者はイエスや弟子たちを裁定している。イエスが行ういやしは神への冒瀆であり（マコ二6と並行箇所）、徴税人や罪人と食事をすることは許されない（マコ二16、ルカ一五2）。洗わない手で食事をする弟子たちは「昔の人の言い伝え」に反しているとされる（マコ七1）。

㋓こうした職務のゆえに、律法学者は「ラビ（先生）」と呼ばれ（マタ二三7）、ユダヤ教社会では名誉ある地位を占め、人々の尊敬を集めた（マコ一二38など）。しかし、福音書ではイエスも「ラビ」と呼ばれ（マコ九5、一〇51など）、律法の解釈をめぐる論争に示されるように（二23以下、三4、七1以下、一〇1以下など）、イエス自身が律法解釈の権威として描かれている。イエスは学者たちに対抗して、彼らの律法に対する態度を批判するが（マタ二三1―36など）、それは律法やその解釈を固守しようとするあまり、律法が神の掟であることを彼らが忘れ（マコ七8）、「律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実をないがしろにしている」からである（マタ二三23）。

㋔イエスは律法が掟として本来命じている正義や慈悲を実現するために行動する（マコ三1以下、マタ五17など）。だが、そうしたイエスの行動は律法学者をはじめとするユダヤ教の指導者層から反感を買い、彼が十字架につけられるきっかけとなっている（マコ三6、八31、一一18、一四1など）。

**③イエスの答え（29―31節）**

ⓐイエスが「第一」に取り上げた掟は、ユダヤ人が毎日唱えていた祈りの言葉（申六4―5）である。マルコだけが、「聞け、イスラエルよ、私たちの神、主は…」という部分をも引用している。申命記6章2節では「あなたの神、主を畏れ、わたしが命じるすべての掟と戒めを守ることは「長く生きるため」であると述べ、それから「聞け」と呼びかけて、「あなたの神、主を愛しなさい」と説いている。戒めは神の呼びかけであり、それが人に命を与える。

ⓑ神を「私たちの」神とわざわざ断るのは、出エジプトなど、神との親密な歴史を思い起こさせ、

神の愛に注意を促すためである。その愛に気づいた者に「あなたの」神を愛しなさい、と呼びかける。「心、魂、理性、強さ」など、人間の持つすべての力をあげて神を愛せるのは、神が先に人を愛したからである。

ⓒイエスが「第二」の戒めとしたのは、「あなた自身を（愛する）ように、あなたの隣人を愛しなさい」という戒めである（レビ一九18）。「あなた自身を（愛する）ように」とあるが、これは自己愛を肯定するのではなく、自己愛に含まれる熱心さに目を向けさせ、自分を愛するあの熱心さで隣人を愛するようにと求められている。

ⓓ神への愛が「第一」とされ、隣人愛が「第二」とされるが、この区別は戒めの優劣を示すのではなく、単純に順序を示し、「（同じように重要な戒めの）一つ目は…二つ目は…」の意味だろう。イエスにとって大事なことは、「これら（神と隣人への愛）よりも大きい、他の戒めはない」ということである。つまり、イエスによれば、神と人への愛は他の掟に抜きん出た戒めであり、律法全体を集約する戒めである。こう言い切ったところに、イエスの新しさがある。

**④律法学者の賛同（32―33節）**

ⓐ神の言葉を説くことを使命とする「律法学者」の一人は、イエスの答えを聞いて、「立派に、先生、真理の上にあなたは言った」と述べている。彼は「神は唯一である」というイエスの答えに賛同するだけでなく、「真理」を語ったイエスを認め、イエスを「先生」と呼ぶ。これはマタイやルカにはない。

ⓑ律法学者はイエスの考えに賛意を表すが、二つの点でイエスの考えを補強している。まずは、32節で「彼（主なる神）を除いて他の神はない」を加え、神の「唯一」性を強調している。

ⓒ次に、33節で「彼（主なる神）を愛すること」と「隣人を愛すること」を共に「まさっている」の主語としていることから分かるように、二つの愛をいっそう緊密にひとつとし、それを「すべての焼き尽くす献げ物やいけにえより」まさっていると述べ、愛を欠いた祭儀のむなしさを主張している。

**⑤論争に終止符（34節）**

ⓐこの律法学者が加えた二つの事は、イエスの意図に沿っている。イエスは彼が「賢明に」答えたのを見て、彼を賞賛し、「あなたは神の国から遠くない」と述べる。「遠くない」と言われたのは、まだすべきことが一つ残っているからである。それはイエスの福音を信じることである。

**⑥イエスを通して神の呼びかけを聞く**

ⓐイエスが旧約からの引用によって問いに答え、そして「律法学者の一人」がイエスに賛同したのは重要である。旧約に示された神の言葉と福音の言葉との間には対立がない。神と隣人への愛は、旧約の民にも新約の民にとっても、同じ神の呼びかけである。そのことを見失うとき、人間は対立へと向かっていく。

ⓑ申命記は「生きる」ためには、戒めを守る必要があると説く。しかし、守り切れなくても、執り成す方が遣わされている。人が神を愛する前に、神が愛を差し出している。この神の愛を生きて示したイエスの福音に聞くとき、人は神と隣人への愛を生きる者へと変えられていく。